

Ⅱ．雑草防除・植物成長調整剤

1．麦類の雑草防除

麦類の雑草防除の要点

- (1) 麦類播種前および播種後出芽前の雑草防除 115
- (2) 麦類播種後の雑草防除 116
- (3) 麦わら処理方法が雑草の発生に及ぼす影響 118

2．野菜の雑草防除

- (1) 除草剤使用の一般的留意事項 119
- (2) 除草剤とその処理方法 121

3．花きの雑草防除 124

4．飼料作物の雑草防除 125

5．水田作物・畑作物（休耕田）および水田作物（水田畦畔）における雑草防除 126

6．植物生育調節剤（野菜） 127

7．植物生育調節剤（花き） 130

1. 麦類の雑草防除

麦類の雑草防除の要点 [\[目次に戻る\]](#)

作物と雑草は、圃場内の共通の場で生育し相互に直接的あるいは間接的に競合している。雑草害として最も問題になるのは、作物の収量や品質に影響を及ぼすことである。また、病害虫の発生源となったり、収穫作業に支障を生じたりする場合もある。

雑草防除をおこなっていくうえで、除草剤を効果的に使用することも必要であるが、耕種的な点についても配慮が必要である。

- 1) 早生水稻跡などは、麦播種まで期間があるため、雑草発生が目立つ場合が多い。耕起前処理の除草剤も有効であるが、明渠や弾丸暗渠の施工による乾田化とともに石灰散布後の耕起など、元草が残らないような対策を講ずる。
- 2) カズノコグサ等の防除対策として、除草剤の体系処理などが実施されているが、完全防除は出来ない圃場が多い。本雑草は、湿潤条件で増加しやすいため、圃場の排水性を高めるなど耕種的手法も併用する。
- 3) 大豆、麦など年間を通して転換畑が続く、スズメノカタビラやミチヤナギなどが問題になる場合には、有効な防除剤（リベレーターフロアブル等）による体系処理や、水稻との輪作体系を行う。
- 4) 近年、タデ類やアメリカフウロ、キンポウゲ類が多く発生し、麦の収穫に支障を来すほど繁茂した状態となった圃場が散見される。現在、普及している土壌処理剤のみでは、発生を十分に抑えることができないため、発生が多い圃場においては、土入れなどによる除草とあわせてハーモニー75DF やバサグラン液剤などこれら雑草に効果のある生育期除草剤を処理する。また、ヤエムグラも同様の問題が発生してきており、効果の高いエコパートフロアブル（薬害が発生しやすいので使用にあたっては注意する）などの生育期除草剤を処理する。

降雨により効果が低下する場合があるので、散布の際は天候を見極めて散布する。

- 5) カラスノエンドウも近年増加傾向にあるため、発生を確認したら早めに抜き取り圃場外へ持ち出し処分する。発生が多い場合は、効果の高いガレース G やゴーゴーサン乳剤などの土壌処理剤や生育期処理剤による防除を行う。
- 6) 生育期の少量の取りこぼし雑草は、作物への影響が軽微と判断できれば、早めの土入れ作業などで防除を図り、必要以上の除草剤散布は実施しない。
- 7) 除草効果を高めるため、耕起碎土は十分おこない、覆土を2～3 cmとし鎮圧後に除草剤を処理する。
- 8) 同一除草剤を長期に連用すると抵抗性雑草の発生による除草効果の低下がみられるので、土壌処理剤と生育期処理剤との体系処理や、他薬剤とのローテーションを組み使用する。

(1) 麦類播種前および播種後出芽前の雑草防除（非選択性茎葉処理）[〔目次に戻る〕](#)

除 草 剤 名	使 用 上 の 注 意 事 項
バスタ液剤 (グルホシネート18.5%)	接触型の茎葉処理剤。 周囲への飛散を避けるため、散布はできるだけ低圧で行なう。 必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 処理後6時間以内の降雨は効果を減じることがあるので天候に注意する。
ブリグロックスL (ジクワット7% パラコート5%)	接触型の茎葉処理剤。 周囲への飛散を避けるため、散布はできるだけ低圧で行なう。 必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 光に反応して速効的に効果を発揮するため、曇天日や夕方など光量の少ないときに散布したほうが雑草全体に剤が広がり除草効果が高まる。低温時でも効果が安定している。
草枯らしM I C (グリホサートイソプロ ピルアミン塩41.0%)	吸収移行型の茎葉処理剤。 周囲への飛散を避けるため、専用塗布器具や必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 処理後6時間以内の降雨は効果を減じることがあるので天候に注意する。
ラウンドアップマックス ロード (グリホサートカリウム 塩48.0%)	吸収移行型の茎葉処理剤。 周囲への飛散を避けるため、専用塗布器具や必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 ラウンドアップ液剤は均一散布のできる範囲の高濃度が望ましい。 少量散布にあたっては、専用ノズルを使用する。 処理後1時間以内の降雨は効果を減じることがあるので天候に注意する。

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。
使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

(2) 麦類播種後の雑草防除 [〔目次に戻る〕](#)

(土壌処理)

除草剤名	使 用 上 の 注 意
サターンバアロ乳剤 (プロメトリン5.0% ベンチオカーブ50.0%)	(1) 麦の出芽前までに処理する。 (2) 粒剤には、生育初期(小麦・大麦4葉期まで、スズメノテッポウ1.5葉期まで)の登録あり。 (3) 砕土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。
サターンバアロ粒剤 (プロメトリン0.8% ベンチオカーブ8.0%)	
トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン44.5%)	(1) 砕土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。 (2) 生育期処理(粒剤：雑草発生前、乳剤：雑草発生始期まで)登録あり。 (3) イネ科雑草に有効(抵抗性スズメノテッポウがある圃場では使用しない)、広葉雑草にはやや効果が劣る。
トレファノサイド粒剤 2.5 (トリフルラリン2.5%)	
ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン30%)	(1) 砕土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。 (2) 乳剤には、大麦生育期処理(雑草発生前)の登録あり。 (3) イネ科及び広葉雑草に有効(抵抗性スズメノテッポウがある圃場では使用しない)。 (4) キク科雑草とツユクサには効果が劣るので、これらの雑草の優占圃場では使用しない。 (5) ヤエムグラ、スズメノテッポウ多発田では400～500cc/10a施用とする。 (6) 湿田・排水不良条件(平畦)では出芽抑制がみられるので使用をさける。
ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン2.0%)	
クリアターン細粒剤F (ベンチオカーブ8.0% ペンディメタリン0.8% リニュロン1.2%)	(1) 麦の播種後速やかに処理する。 (2) 雑草の発生前に散布し、作物が出芽した場合は使用しない。 (3) 砕土整地は丁寧に行い、覆土は種子が露出しないように2～3cmとする。

除草剤名	使用上の注意
ガレースG (ジフルフェニカン0.15% トリフルラリン2.0%)	(1) 碎土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。 (2) 大麦の砂質土壌での使用は避ける。 (3) 土壌水分の高い状態での使用は葉害を助長するので注意する。 (4) 播種深度が浅い場合、葉害を生ずる場合があるので使用しない。
ガレース乳剤 (ジフルフェニカン3.7% トリフルラリン37.0%)	(5) 土壌残効が長いので年内中に散布を終える。 (6) 麦の葉身に白化が見られる場合があるが、その後出てくる葉には白化は認められず回復し、生育、収量には影響しない。 (7) 本剤を散布した圃場で後作物を栽培する場合には、耕起を十分に行う。
バンバン細粒剤F (エスプロカルブ6.0% ジフルフェニカン0.15%)	(1) 碎土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。 (2) 抵抗性スズメノテッポウに有効である。 (2) 砂質土壌や透水性の大きい土壌では葉害の可能性があるので使用を避ける。 (3) 麦の葉身に白化が見られる場合があるが、その後出てくる葉には白化は認められず回復し、生育、収量には影響しない。 (4) 本剤を使用した圃場で後作物を栽培する場合には、耕起を十分に行う。
シナジオ乳剤 (トリフルラリン33.0% I P C 11.0%)	(1) 麦の出芽前までに処理する。 (2) 雑草発生前の散布が有効で発芽後の雑草には効果が劣るので、雑草発生前に散布する。 (3) 砂土での使用は避ける。 (4) 碎土、整地はできるだけ丁寧に行い、種子が露出しないよう播種する。 (5) 激しい降雨が予想される場合は使用を避ける。
ボクサー (プロスルホカルブ78.4%)	(1) 碎土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。 (2) 雑草の発生前～発芽始めの散布が有効である。 (3) 抵抗性スズメノテッポウに有効である。 (4) ノミノフスマに対する効果が劣るので発生圃場では生育期処理剤との体系防除を行う。 (5) 一過性の葉害（黄斑、縮葉）を生じることがあるが、生育、収量には影響しない。
ムギレンジャー乳剤 (プロスルホカルブ46.0% リニュロン11.5%)	(1) 麦の出芽前までに処理する。 (2) 碎土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。 (3) 雑草が発生した後の散布は効果が劣るので、雑草の発生前に使用する。 (4) 抵抗性スズメノテッポウに有効である。 (5) 砂質土壌では黄化・生育抑制を生じる場合があるので登録範囲内の低めの薬量で使用する。 (6) 本剤は後作物に対して影響を及ぼすことがあるので注意する。特に、あぶらな科、うり科、なす科及びまめ科の作物は影響を受けやすいので、本剤処理後3ヶ月以内にこれらを後作物として栽培しない。 (7) 少量散布（25～50L/10a）の場合は専用ノズルを使用する。
キックボクサー細粒剤F (プロスルホカルブ7.0% リニュロン1.75%)	(1) 麦の出芽前までに処理する。 (2) 碎土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。 (3) 雑草が発生した後の散布は効果が劣るので、雑草の発生前に使用する。 (4) 抵抗性スズメノテッポウに有効である。 (5) 一過性の葉害（黄斑・縮葉・生育抑制）を生ずることがあるがその後生育に影響はない。 (6) 後作物に対して影響を及ぼすことがあるので注意する。特に、あぶらな科、うり科、なす科及びまめ科の作物は影響を受けやすいので、薬剤処理後3ヶ月以内にこれらを後作物として栽培しない。
リベレーターフロアブル (ジフルフェニカン8.4% フルフェナセット33.6%)	(1) 碎土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。 (2) 抵抗性スズメノテッポウやカズノコグサに有効である。 (3) ミチヤナギやアメリカフウロ、キンポウゲ、ヤエムグラ等に対する効果の持続性がやや劣るので、発生圃場では生育期処理剤との体系防除を行う。
リベレーターG (ジフルフェニカン0.2% フルフェナセット0.6%)	(4) 砂質土壌や排水不良田では葉害が生じる恐れがあるため使用を避ける。 (5) 大麦では、出芽揃期の高薬量での散布は葉害を生じる恐れがあるため、避ける。 (6) 麦の葉身に白化や黄化、生育抑制等が見られる場合があるが、その後出てくる葉には認められず回復する。
ハーモニー細粒剤F (チフェンスルフロンメチ ル0.15%)	(1) 碎土整地は丁寧に行い、覆土は2～3cmとする。 (2) 広葉雑草及びスズメノテッポウに有効 （ただし、抵抗性スズメノテッポウがある圃場では使用しない）。 (3) 葉害を生じやすいので、周辺作物への飛散に注意する。 (4) 散布器具は入念に洗浄する。

注）各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。

使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注）各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME ＞ 農薬 ＞ 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）

(生育期処理)

除草剤名	使用上の注意
ハーモニー75DF (チフェンスルフロンメチル75.0%)	(1) 広葉雑草及びスズメノテッポウに有効 (ただし、抵抗性スズメノテッポウがある圃場では使用しない)。 (2) 雑草の発生量により、散布薬量を加減する。 (雑草の多い時は薬量は10gとする。また希釈水の量も多くする。) (3) 必要に応じて展着剤を加用する。 (4) 遅効性で、完全に枯死するまでには1か月程度かかる。 (5) 大麦の節間伸長開始後の処理は、減収することがあるので散布時期を逸しないよう注意する。 (6) 処理後、麦の葉身の黄化や生育抑制が見られるが収量への影響はない。 (7) 踏圧前後や土入れ後の処理は避ける(薬害を助長し、生育、収量へ影響するため)。 (8) 野菜等の周辺作物に薬害を生じ易いので飛散や散布後の流出に注意する。 (9) 散布後器具の洗浄は入念に実施する。 (10) 散布器具による事故を防止するため、本剤を使用した器具は他の薬剤散布用には使用しない。 (11) カズノグサには1～3葉まで10g/10a使用土壌処理剤との体系処理で使用する。
アクチノールB乳剤 (アイオキシニル30.0%)	(1) ヤエムグラ、カラスノエンドウ、タデ類に効果がある。 (2) 広葉雑草のみに効果があるのでイネ科雑草に有効な土壌処理剤等との体系で使用する。 (3) 広葉の雑草発生揃～6葉期に有効。 ただし、ヤエムグラは4節期、タネツケバナは2～3葉期まで。 (4) 遅効性で、完全に枯死するまでには20日程度かかる。
エコパートフロアブル (ピラフルフェンエチル2.0%)	(1) ヤエムグラに卓越した効果がある。 (2) 広葉雑草のみに効果があるのでイネ科雑草に有効な土壌処理剤等との体系で使用する。 (3) 広葉雑草2～4葉期に有効であるが、雑草の生育が進むと効果が低下するので、使用時期を失しないように散布する。 (4) 効果の発現が速く、低温条件でも速効的に効く。 (5) 急激な気温の上昇が予想される場合や、ムギ踏み直後、重複散布は薬害が生じる恐れがあるため使用を避ける。 (6) 展着剤は薬害を助長するおそれがあるので加用しない。 (7) 麦の葉身に白斑が見られることがあるがその後の生育、収量には影響しない。ただし、散布時期が遅れると症状が強まる傾向にあるため、散布は麦の茎立期(節間伸長開始期)までとする。
バサグラン液剤 (ペンタゾンナトリウム塩40.0%)	(1) ヤエムグラ、タデ類、アメリカフウロ、キンボウゲ類に効果がある。 (2) 広葉雑草のみに効果があるのでイネ科雑草に有効な土壌処理剤等との体系で使用する。 (3) 散布後、曇天、降雨日が長く続くと効果が劣ることがあるので、晴天時を見はからって散布する。

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム\(農林水産省\)」](#)を参照してください。

使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

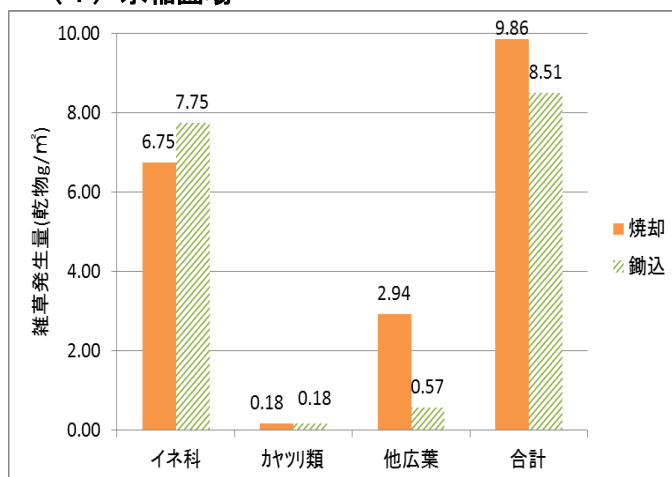
注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

(3) 麦わら処理方法が雑草の発生に及ぼす影響 [【目次に戻る】](#)

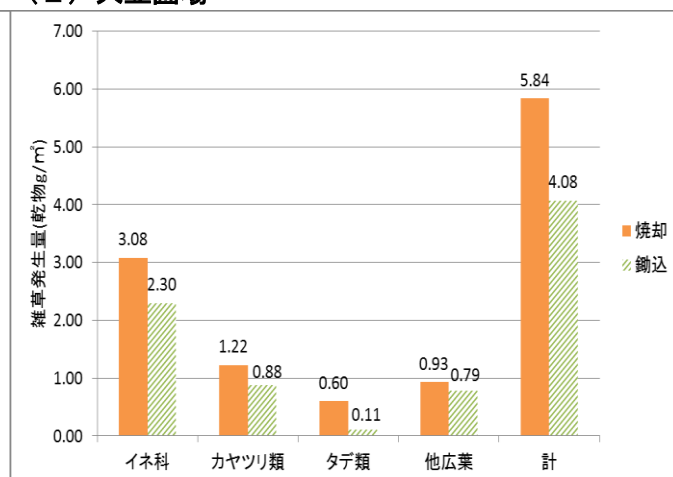
以下のデータは、佐賀県稲わら・麦わら適正処理対策会議において、佐賀県農業試験研究センターを中心に、平成23～24年度の2カ年間にわたって行った現地試験によるものです。

水稻、大豆及び水稻、大豆後作の麦作においても、焼却に比べ、すき込みすることで雑草の発生量が多くなる傾向は見られませんでした。

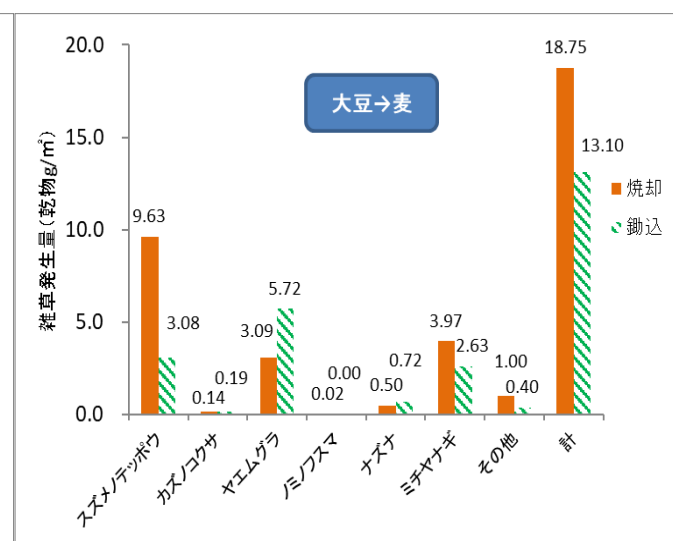
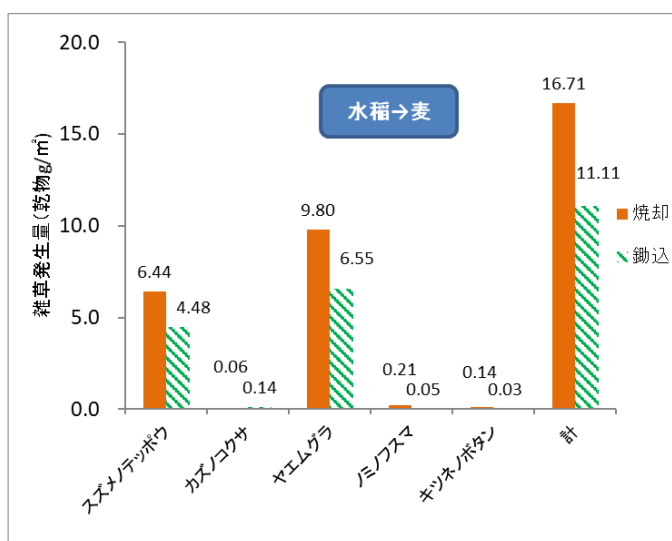
(1) 水稲圃場



(2) 大豆圃場



(3) 麦圃場



2. 野菜の雑草防除 [\[目次に戻る\]](#)

1) 除草剤使用の一般的留意事項

(1) 除草剤の特性

- ① 土壌処理の除草剤は、無雑草の裸地状態で土壌全面に散布する。
雑草発生後の処理は効果の低下するものが多い。
- ② 雑草処理の除草剤は接触効果を示すものが多く、雑草の2～3葉期までに散布しないと効果が低下する。
- ③ 長い年月同一除草剤を使用していると優占雑草の変化がみられる。

(2) 除草剤使用方法

- ① 薬量は 10 アール当りの製品量を表示しているので、使用に当たっては正確に計算し、所要水量に希釈して加圧噴霧機で均一に散布する。重複や、不均一な散布は薬害を生じたり、除草効果が低下する。
- ② 砂壤土では少ない方の薬量を使用する。
- ③ 圃場は均一に整地し、土壌を落ちつかせる。土壌が乾燥したり、土塊の荒い場合は多い方の水量を、湿っている時は少ない方の水量として、乾湿、砂土の良否で水量を決定する。
- ④ は種直後処理は、は種覆土した直後に除草剤を散布する。
発芽や萌芽後の散布は薬害が発生するので注意する。
活着後処理は定植 5 ～ 7 日後の十分に活着した後、できるだけ作物にかからないように散布する。
- ⑤ 除草剤使用後の後作物に及ぼす影響には次のものがあるので注意する。
ゴーゴーサン乳剤 30 の後作用……イネ科に残効がある。3 月末日までに使用する。

(3) 気 象 条 件 [【目次に戻る】](#)

- ① 温 度
一般的に除草剤は高温時に速効的で有効期間が短縮され、作物に対する薬害も発生しやすい。
- ② 降 雨
除草剤処理後 2 日以内に降雨（約 30mm 以上）があった場合、薬液の土中への浸透や流亡等による移動で薬害が生じたり、除草効果が低下したりするので注意する。

(4) そ の 他

- ① 散布時は周辺の作物、住宅などへの飛散防止のため風向、風力に注意し、残液の廃棄や容器の処理についても人、作物、家畜等に被害を及ばないよう十分留意する。
- ② 散布器具は除草剤専用のものを用意することを原則とする。
散布に用いた加圧噴霧機や薬剤容器等は数回入念に洗った後、中性洗剤で仕上げ、数日間水を満たしたまま放置する。
次回使用の時は、約 10 分間くらい水を噴霧した後で使用する。

2) 除草剤とその処理方法 [\[目次に戻る\]](#)

作物名	作 型	適 用 薬 剤	注 意 事 項
キ ャ ウ リ	露地 (移植栽培)	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ソユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 砂土～砂壤土での使用はさける。 定植前に使用する場合は植穴を掘る前に使用する。
ト マ ト	露地	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ソユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 雑草発生前に散布する。
ミ ニ ト マ ト	露地	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ソユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 乾燥時は効果が劣る場合がある。 作物にかかると薬害を生ずるおそれがあるので注意する。
ナ ス	露地	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ソユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 定植3日前までに使用する。
ピ ー マ ン	露地	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ソユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く)
ス イ カ	露地	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ソユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 茎葉にかからないようにする。
	トンネル・マルチ	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ソユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 定植7日以上前に散布し、マルチを被覆し定植数日前に定植箇所のマルチを切開し、気化した薬剤を飛散させてから定植する。 茎葉にかからないようにするため、トンネル除去前に散布する。
		トレファノサイド粒剤 2.5	一年生雑草(ソユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 定植7日以上前に散布し、マルチをかける。定植の数日前に定植箇所のマルチを切開し、気化した薬剤を飛散させてから定植する。 茎葉にかからないようにするためトンネル除去前に散布する。
カ ボ チ ャ	トンネル・マルチ	トレファノサイド粒剤 2.5	一年生雑草(ソユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 定植7日以上前に散布し、マルチをかける。定植の数日前に定植箇所のマルチを切開し、気化した薬剤を飛散させてから定植する。 茎葉にかからないようにするためトンネル除去前に散布する。
イ チ ゴ	親株床	ラッソー乳剤	一年生雑草、雑草の発生前に散布する。
		ワンサイドP乳剤	一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)イネ科雑草3～5葉期
	子苗床	ラッソー乳剤	本圃では、なるべく株に薬液がかからない様にする。
	本圃 施設栽培		
レ ン コ ン	ー	モゲトン粒剤	ウキクサ類 立葉発生前の使用はさける。立葉発生後の使用で処理後一時葉の退色がみられることもあるが、その後の生育収量には殆ど影響しない。

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。
システムの使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#))。

ニンニク	—	トレファノサイド粒剤 2. 5	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く)
タマネギ	本畑	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 生育期の畦間土壌処理の場合は、中耕除草後に処理する。
		トレファノサイド粒剤 2. 5	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 土壌が非常に乾いているときは効果が劣る。 生育期の畦間土壌処理の場合は、中耕除草後に処理する。
		—	—
	秋播	ゴーゴーサン細粒剤 F	一年生雑草。キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	秋播マルチ栽培	ゴーゴーサン細粒剤 F	土壌が極端に乾燥している場合は効果が劣る。畑地一年生雑草。
	移植栽培 直播栽培	ゴーゴーサン乳剤	一年生雑草。イネ科、広葉1年生雑草に効果。
	—	クレマー トU粒剤	一年生雑草。イネ科雑草に有効。
	—	バサグラン液剤 (ナトリウム塩)	一年生雑草(イネ科を除く)。苗床のたまねぎには薬害を生ずるおそれがあるので使用しない。
	移植栽培	アクチノールB乳剤	一年生広葉雑草。高温時の使用は薬害を生じるおそれがある。雑草発生前～4葉期に雑草の茎葉全体に付着するよう均一に散布する。
	露地マルチ栽培	コンボラル	一年生雑草(但しツユクサ、キク科雑草を除く) 露地マルチ栽培で使用する場合は、薬害を避けるため定植7日前までに散布する。
	—	ワンサイド P 乳剤	一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)、シバムギ、レッドトップ。
	—	ナブ乳剤	一年生イネ科雑草3～5葉期(スズメノカタビラを除く)
	移植栽培 直播栽培	グラメックス水和剤	イネ科、広葉雑草、一年生雑草に効果がある。高温時の散布は薬害を生じるおそれがあるので注意する。
	—	セレクト乳剤	一年生イネ科雑草3～5葉期、スズメノカタビラに効果が高い。
	—	ホーネスト乳剤	一年生イネ科雑草(スズメノカタビラに効果が高い)葉面散布肥料との混用または葉面散布肥料散布後の使用は、葉に薬害が生じる場合があるので避ける。
	—	タルガフロアブル	一年生イネ科雑草3～6葉期(スズメノカタビラを除く)。
バレイショ	—	プリグロックス L	萌芽後は使用しない。一年生雑草、有用作物にかからないように散布する。
キャベツ	直播栽培	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く)
	移植栽培	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 植穴を掘る時処理層の土を別にして根部に接触しないようにする。 雑草発生前に均一に散布する。
		トレファノサイド粒剤 2. 5	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く)

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。
使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

キャベツ	—	ゴーゴーサン細粒剤F	一年生雑草。キク科雑草(ツユクサには効果が劣る)。
		アグロマックス水和剤	根が露出するような浅植えをさける。一年生雑草(キク科、カヤツリグサ科を除く)
		フィールドスターP乳剤	一年生雑草(アカザ科・アブラナ科・タデ科を除く)
ハクサイ	直播栽培	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) マルチ、高温、多湿、砂土の使用はさける。作物が発芽してからの使用は薬害を生じるおそれがあるのでさける。
	移植栽培	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 雑草の発生する前に散布する。
	—	ラッソー乳剤	一年生雑草。イネ科雑草に優れた効果。雑草発生前に使用する。
レタス 非結球レタス	露地	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 雑草発生前に均一に散布する。
			6葉展開期以前では薬害を生じるおそれがあるので使用しない。
ニンジン	—	ロロックス	一年生雑草。発芽直後から3葉期末満までは使用しない。
		トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) トンネルでの散布はさける。雑草発生前に散布する。
		ナブ乳剤	一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)
カンショ	—	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 活着するまでに使用する。有機質含量の少ない砂質系土壌では薬害を生じる恐れがあるので使用しない。
とうもろこし	—	ラッソー乳剤	雑草の発生前に使用。一年生雑草。
		ゲザノンゴールド	一年生雑草。雑草の発芽直前から発芽揃期が最も効果的な使用時期。
アスパラガス	—	プリグロックスL	スギナ、一年生雑草。有用作物にかからないように散布する。
		トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く)
		ゴーゴーサン乳剤	一年生雑草。イネ科、広葉1年生雑草に効
		ワンサイドP乳剤	一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)
		ナブ乳剤	一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)
		センコル水和剤	一年生雑草。収穫打ち切り後に使用する場合は、培土崩し後、または中耕後に散布する。
		ザクサ液剤	一年生雑草。
		ロロックス	一年生広葉雑草。雑草茎葉兼土壌散布(畦間・株間処理)。
ダイコン	露地	トレファノサイド乳剤	一年生雑草(ツユクサ、カヤツリグサ、キク・アブラナ科を除く) 薬害をさけるために薬量を厳守し、砂土では低薬量で使用する。

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム\(農林水産省\)」](#)を参照してください。
使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

3. 花きの雑草防除 [\[目次に戻る\]](#)

除草剤名	作物名
トレファノサイド乳剤	きく(露地栽培)
	しゃくやく
	すいせん
	チューリップ
	ゆり
	ひまわり
	べにばな
クロロIPC乳剤	チューリップ
クレマーU粒剤	きく
クレマー乳剤	きく(ポットマム)
	グラジオラス
バスタ液剤	花き類・観葉植物
ゴーゴーサン乳剤	きく
	りんどう
ゴーゴーサン細粒剤F	きく
	チューリップ
ナブ乳剤	きく
	りんどう
シアノット	球根花き
	花木
アグロマックス水和剤	きく

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。
使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

4. 飼料作物の雑草防除 [\[目次に戻る\]](#)

飼料作物雑草防除の要点

- 飼料作物の雑草は稲作等の病害虫の発生源となり肥効効果を低下させ、倒伏雑草のまわりは機械作業の能率をさげるため、除草に努めること。特に、広葉雑草、アオビユは硝酸塩中毒を起す恐れが多いので完全防除をすること。
- 耕種的防除法として
 - ① 雑草種子混入防止のため、家畜ふんの堆肥処理については、60℃、2日間以上の発酵処理を行う。
 - ② ほ場の清浄化（雑草の混入防止や結実前の刈取り）
 - ③ 田畑輪換と耕起による雑草発生防止
- 除草剤は必要最低限の使用にとどめる。

除草剤名	対象作物	使用時期	
ゲザプリムフロアブル	飼料用 トウモロコシ	は種後～とうもろこし2～4葉期まで	○覆土は3cm程度とし鎮圧を丁寧にして薬液を均一に散布する。 ○土壌が乾燥している場合効果が劣る。 ○降雨直前や、砂質土壌は薬害に注意する。 ○広葉雑草ツユクサ等に効果が高い。
	ソルガム	は種後（雑草発生前～始期）	
ラッソー乳剤	飼料用 トウモロコシ	は種後出芽前	○発生前土壌処理剤なので必ず雑草の発生前に使用する。 ○土壌が乾燥している場合効果が劣る。 ○降雨直前や、砂質土壌は薬害に注意する。 ○覆土は2cmとし鎮圧を丁寧にして薬液を均一に散布する。 ○タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣るので、イネ科雑草優占圃場で使用する。
アージラン液剤	牧草	雑草茎葉散布 秋～春期(9～5月)ギンギン類の展葉時期（採草局所処理（雑草茎葉散布）早春～秋期(1～11月)ギンギン類のワラビ展葉期	○エゾノギンギン、ワラビ等に効果がある。 ○散布後7日間は放牧、収穫をしない。また、局所散布した周辺の牧草も飼料にしない。 ○降雨前の散布は避ける。 ○株の堀取り、種子結実前除草など耕種的防除を併用する。 ○春・秋季の2回処理で完全除草ができる。
		ソルガム3葉期（雑草発生前～発生始期）	○は種後処理がすぐれている。 ○ソルガムに使用する場合、覆土は3cm以上とする。また、散播では使用しない。 ○過湿土壌やはげしい降雨が予想される時には使用をさける。薬害は葉のネジレ等が観察される。
	飼料用 トウモロコシ	は種後出芽前（雑草発生前）	○夏播では薬害が発生することがある。 ○イネ科及び広葉の1年生雑草に効果がある。キク科雑草、ツユクサには効果が劣る。
ゴーゴーサン乳剤	ソルガム	は種直後	
	飼料用 トウモロコシ	マルチ前・は種前（雑草発生前）	○降雨直前や、砂質土壌は薬害に注意する。 ○広葉雑草ツユクサ等に効果が高い。
		は種後発芽前（雑草発生前）	○覆土は3cm程度とし鎮圧を丁寧にして薬液を均一に散布する。 ○土壌が乾燥している場合効果が劣る。
ゲザノンゴールド	飼料用 トウモロコシ	生育期（とうもろこし2～4葉期）	

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。
使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

5. 水田作物・畑作物（休耕田）および水田作物（水田畦畔）における雑草防除

除草剤名	使用上の注意事項
バスタ液剤 (グルホシネート18.5%)	接触型の茎葉処理剤。 周囲への飛散を避けるため、散布はできるだけ低圧で行なう。 必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 処理後6時間以内の降雨は効果を減じることがあるので天候に注意する。
プリグロックスL (ジクワット7% パラコート5%)	接触型の茎葉処理剤。 周囲への飛散を避けるため、散布はできるだけ低圧で行なう。 必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 光に反応して速効的に効果を発揮するため、曇天日や夕方など光量の少ないときに散布したほうが雑草全体に剤が広がり除草効果が高まる。低温時でも効果が安定している。
草枯らしMIC (グリホサートイソプロ ピルアミン塩41.0%)	吸収移行型の茎葉処理剤。 周囲への飛散を避けるため、専用塗布器具や必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 処理後6時間以内の降雨は効果を減じることがあるので天候に注意する。
ラウンドアップマックス ロード (グリホサートカリウム 塩48.0%)	吸収移行型の茎葉処理剤。 周囲への飛散を避けるため、専用塗布器具や必要に応じて飛散の少ないノズルや飛散防止カバーを使用する。 ラウンドアップ液剤は均一散布のできる範囲の高濃度が望ましい。 少量散布にあたっては、専用ノズルを使用する。 処理後1時間以内の降雨は効果を減じることがあるので天候に注意する。
ワンサイドP乳剤 (フルアジホップP 17.5%)	イネ科雑草のみに選択的に除草効果を示すので、イネ科優占圃場で使用する。 イネ科作物には薬害を生じるので、周辺にイネ科作物がある場合は飛散しないように注意する。

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。
システムの使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#)）。

[\[目次に戻る\]](#)

6. 植物生育調節剤（野菜）[〔目次に戻る〕](#)

1) トマトトーン [〔目次に戻る〕](#)

(1) 使用法

作物名	使用目的
ト マ ト	着果促進、果実の肥大促進、熟期の促進
ミニトマト	
ナス	
メ ロ ン	着果促進
シ ロ ウ リ	着果促進

(2) 使用上の注意

- ① 同じ花房（花）に重複散布したり、所定濃度以上の濃い液の散布は薬害を生ずるおそれがある。
- ② 頂芽や幼葉にかかると、その部分が萎縮したようになるので、なるべく花または花房にだけかかるように噴霧する。
- ③ メロンの花に噴霧を行う場合、子房だけに噴霧する時は、使用時期にかかわらず人工授粉を併用する。また、低温時（20℃以下）では希釈倍数を低くし、高濃度で使用する。

2) ジベレリン [〔目次に戻る〕](#)

(1) 使用法

作物名	適用ジベレリンの種類	使用目的
うど（春うど）	ジベレリン水溶剤	休眠打破による生育促進
	ジベレリン液剤	
トマト	ジベレリン水溶剤	空どう果防止
	ジベレリン液剤	
イチゴ	ジベレリン水溶剤	果柄の伸長促進
	ジベレリン液剤	
イチゴ（促成栽培）	ジベレリン水溶剤	着果数増加、熟期促進
	ジベレリン液剤	
イチゴ（親株床）	ジベレリン水溶剤	ランナー発生促進
	ジベレリン液剤	
サヤインゲン矮性（促成又は半促成栽培）	ジベレリン水溶剤	節間伸長促進

注）剤型が同じであっても、メーカーによって農薬登録内容が異なる場合があるので使用に当たっては農薬ラベルを参照し、登録状況を確認して使用すること。

(2) 使用上の注意 [【目次に戻る】](#)

春うど

芽及び根株が十分湿る程度に散布する。灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。伏込み後の芽土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさける。

トマト

落果防止剤を使用した後散布すると効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、混用して使用する。

いちご

〈着果数増加・熟期促進〉〈果柄の伸長促進〉

- ① 処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。
- ② 散布適期は休眠に突入してわい化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待できないので、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を決める。
又、第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をする。
- ③ 過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守する。

3) サンキャッチ液剤 30 S [【目次に戻る】](#)

(1) 使用法

作物名	使用目的
かんしょ	肥大促進
タマネギ (秋播露地栽培)	肥大促進
ニンニク	肥大促進

(2) 使用上の注意

- ① 散布当日の降雨は効果を減ずるので、天候を見きわめてから散布する。
- ② かんしょ・たまねぎ・にんにくの肥大促進効果があるが、肥料ではないので、施肥は通常通り行なう。
- ③ たまねぎに使用する場合は、晩生種および乾燥が続く気象条件では、効果が劣るので留意する。

4) フルメット液剤 [【目次に戻る】](#)

(1) 使用法

適用作物（品種）	使用目的
メロン(アムスメロン)	着果促進
メロン(プリンスメロン)	
メロン(コサックメロン)	

(2) 使用上の注意

メロン（アムス、コサック、プリンス）

- ① 奇形果、糖度の低下、ネットの発現不良、果梗部の異常肥大等薬害発現のおそれがあるので注意する。
- ② 果梗部塗布の場合、塗布量が多いと薬害を生じるので、つけすぎないように注意する。果梗部塗布の場合は極細の綿棒を用い、1果あたり2点（果梗の両側）処理で10～20果/1回処理する。
- ③ 糖度の低下等品質低下を防止するため、人工授粉との併用を行うことが望ましい（アムスメロンでは、必ず人工授粉を行う）。
- ④ 子房部散布の場合は、子房部の両側からていねいに散布する。この場合、薬液が花（柱頭）にかかると受粉障害をおこすので、花にかからないよう注意する。
- ⑤ 調製した薬液は効果の低下のおそれがあるので、調製当日に使いきる。
- ⑥ 処理後の降雨は効果を減じるので、降雨が予想される場合は処理をしない。また、異常な高低温、多雨、乾燥など異常気象の続くときは使用しない。

5) ビビフルフロアブル [【目次に戻る】](#)

(1) 使用方法

作物名	使用目的
イチゴ（促成栽培）	生育後期の伸長抑制
	葉柄伸長抑制による苗の徒長防止

(2) 使用上の注意

- ① 生育後期の伸長抑制で使用する場合は、目的とする抑制の程度に応じて散布回数を調節する。2～3回散布するときには、1ヶ月程度の間隔をあける。
- ② 暗黒処理時の徒長防止で使用する場合、散布後の気象条件によっては散布液量が多いと収量へ影響することがあるので注意する。
- ③ 多量散布や重複散布は、作物の品質に影響する場合があるので避ける。

7. 植物生育調節剤（花き）[\[目次に戻る\]](#)

1) 植物生長調節剤の使用上の注意

- (1) 生長調節剤の使用にあたっては、剤型やメーカーの違いによって農薬の登録状況が異なるので登録内容を熟知し、適正に使用する。また、極めて微量で作物に作用する性質上、生育状況、栽培環境などで効果が不安定となりやすいので、対象作物が適正な栽培管理のもとで使用する。
- (2) 生育調整剤は種類によってその有効成分と含有量に差があることがあるので注意する。
- (3) 農薬など他の薬剤との混用はさける。
- (4) わい化剤の処理方法には、茎葉散布と土壌かん注とがあるので、対象作物に応じて使い分ける。
茎葉散布の場合は、植物全体に散布し、土壌かん注の場合は、所定量を水にうすめ、鉢土全体に均一にかん注する。

商品名および剤型	作物名	使用目的
アルムグリーン	ばら	挿し木の発根促進
エスレル 10	ほおずき	着色促進
	きく	開花抑制
	きく（電照栽培）	早期不時発蕾防止
オキシベロン粉剤0.5	ベゴニア	さし木の発根促進及び発生根数の増加
	きく	
	カーネーション	
オキシベロン液剤	チューリップ	花茎基部の伸長
	カーネーション	さし木の発根促進及び発生根数の増加
	きく	
	花き類・観葉植物（カーネーション、きく及びチューリップ）	
ジベレリン 注）水溶性剤、液剤、顆粒剤等の剤型があり、剤型あるいはメーカーの違いによって含有率や農薬登録状況が異なるので、使用に当たっては農薬ラベルを参照し、登録のある剤を使用すること。	シクラメン	開花促進
	プリムラ（マラコイデス）	開花促進
	みやこわすれ	開花促進、草丈伸長促進
	きく	開花促進、草丈伸長促進
	しらん	開花促進、草丈伸長促進
	チューリップ（促成栽培）	開花促進
	てっぽうゆり（促成栽培）	休眠打破
	トルコギキョウ	生育促進
	りんどう	発芽促進
		生育促進
	花き類（りんどうを除く）	発芽促進
	アイリス	生育促進
	カラー	生育促進
	ソリダコ	生育促進
	スパティフィラム	開花促進
	アザレア	開花促進
	さくら（切り枝促成栽培）	休眠打破による生育促進
	さつき（施設栽培苗）	茎の伸長促進、花芽分化の抑制

商品名および剤型	作物名	使用目的
スミセブン P 液剤	キク（ポットマム）	節間の伸長抑制（矮化）
	ポインセチア	
	アゲラタム	茎葉の伸長抑制による小型化
	サルビア	
	金魚草	
	けいとう	
	ゼラニウム	
	はぼたん	
	ペチュニア	
	マリーゴールド	
	日々草	
	まつばぼたん	
	パンジー	
	インパチェンス	
	ヒペリカム（鉢栽培）	
	シンフォリカルポス（鉢栽培）	
ビーエー液剤	きく	親株栽培における側枝への腋芽の着生促進
	カーネーション	側芽発生促進
ビーナイン顆粒水溶剤	きく（切花用）（施設栽培）	節間の伸長抑制
		花首の伸長抑制
	きく（ポットマム）（施設栽培）	節間の伸長抑制
	パンジー（施設栽培）	
	ポインセチア（施設栽培）	
	ハイドラングシア（施設栽培）	
	はぼたん（施設栽培）	
	ペチュニア（施設栽培）	
	アザレア（施設栽培）	
	あさがお（施設栽培）	
	しゃくなげ（施設栽培）	節間の身長抑制、着蕾数増加
キクエモン	きく（切花用）（施設栽培）	節間の伸長抑制
		花首の伸長抑制
	きく（ポットマム）（施設栽培）	節間の伸長抑制
ビビフルフロアブル	シクラメン（施設栽培）	花梗、葉柄の伸長抑制
	きく	花首伸長抑制
フルメット液剤	ストック	開花促進
	チューリップ（促成栽培）	花丈伸長促進及び茎の肥大促進
ルートン	花き（きく、ゼラニウムなど）	挿木（挿苗）時処理して発根を促進する。

注）各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。
使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注）各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME ＞ 農薬 ＞ 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

[\[目次に戻る\]](#)